

新任教授のご紹介



探究心を持つとう

新潟大学脳研究所 脳疾患標本資源解析学分野
教授 他田 真理

令和6年5月1日付で新潟大学脳研究所脳疾患標本資源解析学分野の教授に就任しました他田真理と申します。自己紹介を兼ねて、私のこれまでの経歴と学生の皆さんにお伝えしたいことを書かせていただきます。

私は学生時代、新潟大学脳研究所が主催する夏季セミナーに参加しました。このセミナーでは、脳神経内科の診療や病理学分野の剖検脳の肉眼観察（brain cutting）の見学、脳研究所での聴講を通じて、神経疾患の診療と研究に興味を持ちました。この経験をきっかけに、平成9年に秋田大学を卒業後、新潟大学神経内科に入局しました。その後、大学病院や関連病院で神経内科医として研修・勤務し、さまざまな神経疾患の診療を経験する中で、患者一人ひとりに寄り添い、最善の策を追求する姿勢を学び、現在の研究活動の基盤となっています。

研究を始める契機となったのは、多系統萎縮症という神経難病の自然歴に関する調査でした。その後、この疾患でしばしばみられる突然死の原因を探るため、大学院に進学して自律神経系の組織解析を行いました。研究を進める中で、多系統萎縮症の突然死に延髄セロトニン神経細胞の脱落が関与する可能性を見出し、「疑問を持ち、答えを探すこと」の楽しさを実感しました。大学院卒業後は神経病理学を専門とし、中枢神経系の生検や剖検例の組織診断に携わりながら研究を続けています。私の研究の多くは、担当症例の病理所見から生じる疑問を解決したい、気づいたことを確認したいという気持ちから始まっています。

大学院時代には、夫の留学に同行してミシガン大学で研究する機会を得ました。専門の異なる研究室で異文化の人々と交流しながら研究を進める中で、積極的にコミュニケーションをとること、他者の考えや立場を尊重すること、そして主体的に考え行動することの重要性を学びました。このことは研究室の中にとど

まらず、日常生活についても同じことが言えると思います。米国での経験は、社会人として、そして研究者としての自立につながり、帰国後に研究活動が続ける自信や、視野の広がり大いに役立ちました。

私が現在所属する脳疾患標本資源解析学分野は、精神神経疾患に関連する脳疾患標本リソースを保管し、その有効活用を推進することを目指しています。これらの研究資源は、患者さんやご家族、臨床医、病理医が連携し、長年にわたり積み上げてきたものです。この貴重な資源を活用し、最新の研究手法や国際的なネットワークを用いて、社会に医学や医療の進歩として貢献できる成果を還元していきたいと考えています。

学生の皆さんには、「探究心」の大切さをお伝えしたいと思います。日々の診療や学びの中で湧き上がる疑問を追求する姿勢が、新しい発見の原動力になります。困難や失敗があっても、好奇心があれば、研究を続ける力になるはずです。ぜひ、興味のある分野に積極的に飛び込み、自らの小さな疑問や気づきを大切に、それを深く掘り下げてみてください。それが研究の楽しさを見つける鍵となるでしょう。

また、周囲の医療者や研究者との交流を積極的に行い、ネットワークを広げることも重要です。異なる背景や立場を持つ人々との関わりは、新しいアイデアや視点を得る良い機会となります。現代のように医療や研究手法が高度化・多様化する中で大きな成果を生むには、多部門の協力が不可欠です。そして、難しい国際情勢の中でも海外に目を向け、異文化の中で学び、研究や診療をする経験は必ず自身の成長につながります。

新潟大学での学びが、皆さんの医療者・研究者としての未来を広げるものとなるよう、心から応援しています。



学生時代にしかできない経験と 出合いを大切に

分子・診断病理学分野
教授 大橋 瑠子

2024年3月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科 分子・診断病理学分野教授に就任いたしました大橋瑠子です。私は新潟県旧西蒲原郡西川町の出身で、新潟県立三条高等学校を卒業後、1995年に浜松医科大学に入学しました。小学校のクラブ活動で始めたトランペットを中学高校と続け、大学ではオーケストラ部に入り、さらに地元の吹奏楽団やジャズバンドで演奏し、全医体のオーケストラ版である全国医科学生オーケストラでは首席トランペットを務めるなど学生時代は音楽漬けの生活をしていました。

半ば学業そっちのけに見えますが、部活の先輩達が浜松医大の心理学教室に入りして実験や脳科学の勉強や飲み会をしていたのに誘われたことがきっかけで、3年次の基礎配属は心理学教室に行きました。途中、新潟大学医学部神経解剖学教室には先端技術があるから帰省ついでに行って実験してくるように、と教授から言われ派遣されたことで、免疫染色で遺伝子・タンパク発現の動向を顕微鏡で観察できるめくるめく世界を知り、将来この技術を使って研究してみたいと考えるようになりました。

一方で病理は苦手科目で、追試に落ちてレポートを課されたことで病理医という極度の人手不足の職種を知りました。私は机上の勉強は苦手でも顕微鏡は好きでしたので、病理医が一人増えれば世の中に大きく貢献できると考えたこと、病理医としてなら顕微鏡の専門家として研究と診断を両立できると思ったこと、実習での恩師（当時聖隷浜松病院勤務、現立川総合病院の小林寛先生）との出会いから病理医を目指し、2001年に卒業後は母校の第一病理に入局しました。2003年に地元新潟に戻って以来、2017年の一年間のスイス・チューリッヒ大学留学を挟んで21年間に渡り新潟大学に勤務してきました。新潟では血液病理が専門の内藤

眞名誉教授、消化管病理が専門の味岡洋一名誉教授の指導の下、苦手だった血液病理、消化管病理に取り組み、腎癌病理や呼吸器病理も学会などでの出会いを通じて苦手分野から得意分野、専門分野に変えていきました。

学生時代に音楽に打ち込んだことは、その後当時は思いも寄らなかった展開になりました。日本病理学会の記念行事での演奏に向けて日本病理医フィルハーモニーというオーケストラが結成されたことで、音楽を通じて多くの病理医や法医学、臨床医の先生方と出会い、学生時代の音楽仲間や先輩後輩と今でも一緒に演奏する機会があるばかりでなく、部活の先輩に協力をお願いしたのが発端で腎癌病理の領域では世界最大規模の国際共同研究に繋がり、新潟から世界へ向けて研究成果の発信を続けています。最近新たに知り合った先生が実は別の分野の知り合いとお酒仲間や音楽仲間だった、といったことにはしばしば遭遇し、”It's a small world (世の中狭い)”と思わざるを得ません。振り返れば学生時代や卒後間もない頃の経験や出会いが、今の私の病理医としての基盤となっており、後はそこから広がっていったように思います。これまで出会った方々との交流、様々な局面で私を支え、困難を乗り越える力となってきました。

学生時代は自分の興味を自由に追求できる貴重な時間です。勉強に真剣に取り組むことはもちろん重要ですが、部活動の他、スポーツ、趣味、ボランティア活動など、学業以外の経験もぜひ積極的に挑戦し、存分に楽しんでください。これらの経験や出会いは、一見すると医学の道とは直接関係がないように思えるかもしれませんが、その中で培われる柔軟な思考や広い視野は、皆さんを大きく成長させてくれます。そして、皆さんが未来に向かって進む力となり、どんなときも皆さんを支え、導く灯となります。将来医師として働くとき、教科書や講義で得られる知識だけでなく、多様な価値観を理解する力や豊かな人間性が必要とされる場面が必ず訪れます。それを支えるのが、学生時代に築いた多彩な経験と出会いです。医学の道は長く続く学びの旅であり、平坦な道ばかりではなく困難や壁にぶつかることもあるかもしれません。あの時の経験があったから今がある、あの人との繋がりがあったから助かった、と感じる日がきっと来ます。未来の医療を担う皆さんが、充実した学生生活を送り、これからも成長し続け、将来素晴らしい医師として活躍し社会に貢献されることを心から願っています。



—新潟大学医学部での ウイルス学研究—

ウイルス学分野
教授 阿部 隆之

令和6年1月1日をもって、新潟大学大学院医歯学総合研究科ウイルス学分野の教授を拝命いたしましたので、ご挨拶申し上げます。またこの度、新潟大学医学部学友会にご挨拶できることを大変光栄に思っております。

研究歴も含めて、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は新潟県新潟市の出身であり、これまでに千葉、大阪、米国（フロリダ州とニューヨーク州）、神戸の大学や研究機関を渡り歩き、約30年振りに故郷の新潟に戻って参りました。私の生家は新潟大学医学部・病院から近くであり、また小中学時代は少し離れた旧六花寮のグラウンドも遊び場でした。当時と比べて、新潟の街並みも綺麗になったと同時に、何やら人口減も感じている今日この頃です。この度、幸運なことに、新潟大学医学部医学科でウイルス学教室の研究室主催者としての機会を頂き現在に至っております。これまでの研究歴は一環としてウイルス学の基礎研究が主であり、インフルエンザウイルス、肝炎ウイルス、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）などの新興・再興ウイルス感染症を対象としてきました。具体的な内容としては、ウイルスの感染・複製機構の解析や、ウイルス感染に対する自然免疫応答とウイルスによる回避機構の解析、またワクチンや抗ウイルス剤の開発研究などを行っています。この間の（個人的に）最も大きなウイルス学研究のインパクトとして、C型肝炎ウイルスの感染が原因で起こるC型慢性肝炎が治療可能な時代になったことが挙げられます（2020年のノーベル医学生理学賞の受賞対象研究）。この成果は、基礎研究から得られたウイルス学的な性状の理解が大きく貢献したことに起因します。また昨今のCOVID-19の世界的なウイルス感染症パンデミックは、一般の方々だけでなく多くの医療従事者、医師及び研究者にとっても未知のものであり、私たちの社会に大きな爪痕を残しました。これらのことが

らも、ウイルス感染症は未だ医療現場及び医学教育の中でも重要であることが強く示唆されます。ウイルス学教室としては、今後出現し得る新たな新興・再興ウイルス感染症研究にも積極的に関わっていき、医学教育ならびに医療（診断や治療）に貢献していきたいと考えています。また、医学生にも医学研究実習を通してウイルス学の神秘性や基礎研究の楽しさ、奥深さを伝えていければと思います。ウイルス学に興味のある方、ウイルス学教室はいつでもオープンに対応しますので遠慮なく見学等にお越しください。医学研究者の育成にも対応しますので、ウイルス学で学位取得を考えている方のご連絡をお待ちしています。